デカルトにおける永遠真理創造説と「数学の懐疑」

久保田　進　一

はじめに

デカルトは1630年のメルセンヌ宛の書簡の中で永遠真理創造説について初めて触れた。永遠真理創造説とは、簡単に述べれば、神によって永遠真理が創造されたという説である。この説はデカルトの主意主義を特徴づける説であるが、これと『省察』における「数学の懐疑」の箇所を関連づける議論がある。[(1)] しかし、果たして、永遠真理創造説と「数学の懐疑」を絡めていいのであろうか。このことは解釈上、『省察』本文に永遠真理創造説を読み込んでいいのかどうかということに関わる問題となってくる。

本論文では、永遠真理創造説と「数学の懐疑」の関係を切断し、『省察』本文に永遠真理創造説を読み込べきではないことを示したいと思う。そのために、まず、永遠真理創造説と「数学の懐疑」が、どのようなものであるのかを確認し、共通点を示す。しかし、その共通点を見出したとしても、永遠真理創造説と「数学の懐疑」を関連づけると、神の全能性と誠実性において困難な問題が生じてくるのである。それは、神が全能だからと言って、神の誠実に反することまで可能なのかということである。つまり、神が全能でも神には不可能な場合があるのではないだろうか。というのも、神の誠実性は「欺く神」に反するのであり、神の全能性を主張するが故に神の誠実性がないがしろにされ、神の完全性をも否定することになるかもしれないからである。神が完全性を備えているのなら、全能性と誠実性はどのように折り合いをつけるべきなのであろうか。これらを考察することによって、神の全能性と誠実性さらには完全性が神という概念の中にうまくおさまっており、神の概念から逸脱してはいないということを述べたい。そして、

神の本性から「欺く神」を永遠真理創造説の神に反映させることには無理があるということを示す。以上のことによって、永遠真理創造説と「数学の懐疑」の箇所は関連づけてはいけないことを論じ、デカルトの主張する神をどのように理解するべきかを提示しようと思う。

1．永遠真理創造説と「数学の懐疑」における真理の設定

永遠真理創造説がデカルトにおいて最初に出てくるのは、1630年の4月15日付けのメルセンヌ宛の書簡においてである。その後、同年5月6日付け・5月27日付けの同人宛の書簡において説明が補われている。その内容は、簡単に言えば、神が永遠真理を創造した、ということである。では、デカルトの言うところの永遠真理がどのようなものであるかを実際に書簡に振り返って見てみよう。

「しかし、私は私の自然学において、多くの形而上学的問題、とりわけ次の問題に言及することなく済ますわけにはゆかないでしょう。すなわち、あなたが永遠的と称する数学的真理は、神によって定められたのであり、残りの全ての被造物と同様に神に全く依存しているということです。実際、それらの真理が神から独立していると言うことは、神を語るのにユピテル（天地至高の神）あるいはサトゥルヌス（農耕の神）を語るように、神をステュクス（三途の川）や運命の支配下に置くことなのです。王が自分の王国に法を定めるのと同様に、神が自然のうちに法を定めたということを、至る所で公言することを恐れてはならないのです」（AT. I. 145.[12]）

「人はあなたにもし神がそれらの真理を設定したのであれば、神はちょうど王が自分の法に対して行うように、それらを変えることもできるであろう、と言うでしょう。それに対しては、もし神の意志が変えることができるならば、然りと答えなければなりません。―しかし、私はそれらの真理を永遠で不動のものと理解します。―そして、私はと言えば、神についても同様だと判断します。しかし、神の意志は自由なのです。―そうです。しかし、神の

力能は理解不可能なのです」(AT. I. 145-146.)

この内容から見ても分かるように、デカルトは「永遠真理」を数学的真理として見ていたということが分かる。それは神によって創造されたのであり、神によって数学的真理は設定されたのである。神が真理を設定する以前には確定した真理は存在せず、ただ神の意志によってのみ定まるのである。神が何故そのように設定したのかどうかは、我々人間には理解不可能なのである。それ故に、この永遠真理創造説における神の特徴としては、神の全能性が積極的に強調されているのである。すなわち、神は何者からも束縛されることのない自由な存在であり、その意志は非決定(indifferens)なのである。さらに、我々には神の力能を包括的に理解することは不可能なのである。次に「数学の懐疑」の箇所を見てみよう。

「私は、他の人々が、自分ではきわめて完全に知っているつもりの事柄においてまちがっている、と思うことがときどきあるが、それと同じように、私が、二に三を加えるたびごとに、あるいは、四角形の辺を数えるたびごとに、あるいは、他にもっと容易なことが考えられるならば、それをするたびごとに、私が誤るように、この神は仕向けたのではあるまいか」(AT. VII. 21.)

ここでの懐疑はデカルトが、何か確実なものを見出すために、「欺く神」によって、数学のような「透明な真理」(AT. VII. 20.)においてさえも私が誤るように仕向けられているのではないかという懐疑である。この場面は、神の存在証明以前の箇所であり、更に言えば、コギトが見出される以前であり、確実なものを探求している場面である。すなわち、真理の真理性が疑われており、永遠真理が創造される以前の段階の場合と同じように、数学的真理が真理なのかまだ設定されていないのと同じ状況なのである。従って、永遠真理創造説と「数学の懐疑」の場面は、我々人間には真理が真理としては与えられているかどうかわからないのである。

言い換えれば、真理を定めた神、あるいは我々人間よりも有能な欺き手によっ

て、真理の内容は変更可能であり、我々には真理が真理としての資格を与えられないままになっている。すなわち、神の保証がない単なる意見（opinio）でしかなく、まだその真理は確定されていないのである。つまり、学知（scientia）には至っていないのである。そういう意味では、永遠真理創造説での数学的真理と「数学の懐疑」における数学的真理は、共通の土俵にあると言える。一方の永遠真理創造説における神が設定しようとしていたのは「永遠真理」そのものであり、他方、「数学の懐疑」において、デカルトが懐疑していたものは数学の本質であり、それは「永遠真理」そのものである。それによって、数学の明証性や真理性を懐疑することができ、デカルトが行っていた懐疑は、徹底した懐疑と言えるのである。

真理の設定という点において、永遠真理創造説における数学的真理の創造を為した「全能の神」から「欺くことのできる神」という想定が出てくると言える。つまり、全てをなしうる神なら、極めて明白な数学的真理の認識においても私を誤らせることができるはずだという想定がそこにあると言えよう。

そして、時代的に見れば、永遠真理創造説が出てくる書簡の方が『省察』よりも先にあるので、真理の設定あるいは真理の変更という観点からすれば、「数学の懐疑」は永遠真理創造説を前提にしていると言えるのかもしれない。

しかし、果たして、そのように言えるのであろうか。そのことを考察するために、永遠真理創造説と「数学の懐疑」について、もう一歩踏み込んだ考察をしなければならない。つまり、両者に見られる神をどのように理解するかが問題となってくるのである。

2．永遠真理創造説の神と「欺く神」における問題

さて、これまで見てきたように、永遠真理創造説と「数学の懐疑」は、真理の設定以前と言う観点からすれば、共通の土俵にあった。それは、神の全能性に訴えることで、両者とも真理の設定・変更が可能であるということが言えた。しかし、もう一歩踏み込んで考えてみるのなら、永遠真理創造説における神と「数学の懐疑」における「欺く神」を同一視した場合、何も問題は生じてはこないので

あろうか。もし問題が生じてくるのであれば、『省察』本文に永遠真理創造説を読み込んではいけないことになる。では、一体どのような問題が生じてくるのであろうか。

そもそも「欺く神」というのは、神にはふさわしくない言葉である。「欺く」ということは神の本性から外れているからである。しかし、永遠真理創造説における神と「数学の懐疑」における「欺く神」を同一視するなら、このことは外れていないことになる。そうすると、永遠真理創造説における神も欺くことになる。このことは、問題を次のように言い換えることができるであろう。永遠真理創造説における神が欺くということは、神は我々が真理と抱いている真理体系を真理ではないように創造することができる、と言える。更に言えば、神は矛盾した真理体系をも創造できる、ということを意味することになる。このことが言えるのは、神の全能性つまり非決定を最大限に解釈した場合である。しかし、このことは神の誠実性に抵触する恐れがある。つまり、神の全能性と神の誠実性は矛盾しないのか、ということである。

また、誠実性に関して言えば、真理を変更するということは、神の誠実性に反しないのか、ということも神の全能性に関わる問題となる。つまり、神の全能性から言えば、真理を変更することは容易でなくてはいけない。神が真理を創造したと言うことは、真理すらも神とは独立しているのではなく、神に全面的に依存しているのであり、他のいかなるものにも依存していないからである。しかし、神が一度定めた真理を変更するのなら、そこでは神の誠実性と完全性に抵触してしまうのである。このことが、「欺く神」であるなら、何も誠実性には抵触しないし、もちろん完全性にも抵触しない。永遠真理創造説における神と欺く神を同一視する場合、このような問題が生じてくるのである。

3．全能性と誠実性

3.1　矛盾した真理体系における全能性と誠実性

神の全能性と誠実性をどのように扱うべきであろうか。まず、問題としては、神の全能性が神の誠実性と矛盾するかしないか、という問題から取り扱う。この

問題は、大きく二つに分けることができる。一つは、神はその全能性から言えば、矛盾した真理の体系をも創造可能であったと言う問題である。次に、その全能性から言えば、真理を変更可能なことは容易であるが、そのことと誠実性とが矛盾するかしないかと言う問題である。

まず、第一の問題から見てみよう。神は矛盾した真理の体系を創造可能であったと言うことは、神の全能性を最大限に解釈すれば、可能であったと言うことができる。ただし、矛盾ということに関して、誰の視点からの矛盾なのかが問題となる。それは、我々人間からの視点と神からの視点の二つに分けることができる。ただし、前者は我々が理解できる範囲であり、後者は我々には理解不可能な次元である。しかし、我々人間の視点からの矛盾というのは、これは明らかに神が自然のうちに定めた真理にも同様に矛盾する。なぜなら、神は自然のうちに真理を定めたのと同様に、我々の知性のうちにも真理を植え付けたからである。我々が真理を真だと認識するのは、神の力能の結果なのである。つまり、「まず、第一に私は、私が明晰判明に理解するものはすべて、私の理解するとおりに神によってつくられうるということを知っている」(AT. Ⅶ. 78.) のであるから、したがって、我々が矛盾だと明晰判明に理解するものは、神にとっても矛盾であるものとして自然のうちにつくったのである。このことは、神が我々の精神に真理を植え付けたということの裏付けとなっている。もし、我々が明晰判明に矛盾と認識するものが神が自然に定めた真理と異なるのであれば、デカルトの主張する生得説は成り立たなくなってしまうからである。もしくは、神が不誠実であることになってしまう。永遠真理創造説における神は、自然のうちに設定した法 (数学的真理) を、真理の種子として我々の精神の内に生得的に植え込んだのである。そのため、我々にはそれ以外の仕方で思惟することはできないのである。

ここで、矛盾という言葉の意味を考えてみるならば、そもそも矛盾とはその体系が成り立たないことを意味する。「真ではない」ということとは、異なるのである。[(3)] というのも、「矛盾であること」と「真ではないこと」は同じではないのであり、体系が異なれば、真・偽が異なる場合があるからである。ある体系では「真ではないこと」も別の体系では「真である」場合もある。そのため、デカルトも 2 + 3 = 5 ではないとか、あるいは「円の中心から円周に対して引かれた全

ての直線は等しい、ということを真ではないようにすることもできた」(AT. I. 152) ということで、神の全能性を説明しているのである。ここで注意しなければならないことは、デカルトは決して2＋3＝6であることもできたと言っているのではないのである。[(4)] すでに神が我々に真理を植え付けた後では、我々には理解不可能な真理を説明するためには「～ではない」とか「～は真ではない」という消極的な表現でしか説明できないのである。というのも、もしデカルトが2＋3＝6であることもできたと言ってしまうと、それはデカルトがその真理体系を知っていることであり、神の理解不可能性ということから、外れてしまうからである。もしくは、それでも理解不可能性という点に重点を置くのなら、2＋3＝6という命題の意味を無意味に使っているか、安易に使っていることになる。それ故に、デカルトは消極的な表現で神の全能性を説明しようとしたのであり、そのような仕方でしか説明できないことを知っていたのである。一方、「矛盾であること」とは一つの体系の中に同時には成り立たない命題が存在し、その体系そのものが成り立たないことを意味する。体系が成り立つためには、無矛盾であることが必須の条件なのである。したがって、我々が理解するところの矛盾である体系は、ありえないことになる。それでも、そのような体系を主張するのなら、単に我々には理解不可能な体系と言うべきなのである。

では、我々人間には理解不可能であるが、神の視点からでは矛盾である体系は可能なのであろうか。この場合、矛盾であると理解できるのは、神だけである。神の全能性を最大限に解釈すれば、可能だと言わざるを得なくなる。矛盾である真理をも創造できたと言えるだろう。ただし、その場合、我々人間には矛盾であるかどうかは理解不可能ということになる。当然、我々には真であるか偽であるかも判断できないのである。神の全能性から言えば、神にのみ理解可能な矛盾である真理を創造することができると言えるかもしれないが、次のような問題を引き起こすことになる。それは、神の視点から矛盾である真理と言ったとしても、矛盾であると言うことは、体系が成り立たないことを意味するので、[(5)] 体系が成り立ってはいないのに、何らかの真理があるということになってしまう。あるはずのない真理を真理とするのであるから、神は自分自身を欺いているということになる。そのような神は自己欺瞞をしている神となり、不誠実な神となる。そのよ

うな神は果たして完全であると言えるであろうか。むしろ、不完全であると言うべきではなかろうか。不完全な神は、やはり、神という名にふさわしくないのである。デカルトは神について次のように言う。

「第一のそして最高の存在者について考え、この存在者の観念をいわば私の精神の宝庫から取り出そうとするたびごとに、私は必然的にその存在者にすべての完全性を帰属せしめなくてはならぬ」(AT. I. 67.) と。

ここで、言わている「第一のそして最高の存在者」とは、もちろん神のことである。神に帰するのは完全であることであって、不完全であるということは、神自身が神の本性から外れることになる。すると、神は矛盾である真理体系を創れることも可能であったと言うべきではないのである。もし、そのことを受け入れると、すぐに神自身に跳ね返ってくるのである。

したがって、神は人間の見地からも神の見地からも矛盾である真理体系を創造することができたとは言えないことになる。それは、人間の見地に立てば、生得説から矛盾した真理体系は創造されないことが言える。神の見地に立てば、自己欺瞞である神が導き出され、完全性という神の本性から外れることになり、やはり、神の見地からでも、矛盾である真理体系は創造されないことになる。ただし、それでも神の全能性・無限性を踏まえて、神は矛盾である真理体系を創造可能なのだと言うのであれば、我々には当然理解することはできないし、我々が理解する真理体系から言えば明らかに矛盾となるが、我々が理解するのとは異なる別の体系、すなわち我々には矛盾であるが神には矛盾ではない体系を神は自由に創造することができた、と言うべきなのである。

3.2 真理の変更における全能性と誠実性

次に、真理の変更に関して、神の全能性と誠実性に関わる問題を見てみよう。問題は、神の全能性から言えば、真理を変更することは容易であるが、そのことが神の誠実性に抵触しないのであろうか、ということである。なぜなら、神が永遠真理として我々に植え付けた真理が変更されると言うことは、変更される前と

後の真理というものが永遠真理としての身分を保ちえず、たとえ我々には変更されたことが気付けないとしても、それは神の誠実性から言えば、不適当であるからである。また、一度設定した真理を変更することは、神の完全性に抵触しないのであろうか。

永遠真理創造説における神は、数学的真理のような「永遠真理」を「王が自分の王国に法を定めるのと同様に」、「自然のうちに法を定めた」のである。「永遠真理」というからには、一度設定したのなら、永遠不変でなければならない。何度も設定し直されてしまったら、それは永遠ではなくなる。もちろん、神にとっては、真理を設定し直すことは容易なことであるので、神による真理の変更は可能である。しかし、それは神の視点に立った場合である。人間には、少なくとも設定し直されたことが気付かれてはならないのである。したがって、もし神が新たに真理を変更したとするのなら、真理の内容はもちろんのこと、真理の内容が変更されたということすらも気付かれないように神は創造しなければならないのである。人間には、真理が変更されたということが気付かれないように、一つの証拠も残さずに神は創造したのでなければいけないのである。つまり、「永遠真理」というのは少なくとも人間にとっての永遠であり、神にとっては全能という点から何度でも創造可能なのだということになるのかもしれない。しかし、このような神は、全能であるかもしれないが、誠実ではなくなる。それは、常に人間には気付かれないように、欺いていることになるからである。人間にとって、神は最高の欺き手となってしまうのである。しかし、デカルトは神について、次のように述べている。

> 「ここに私が神というのは、その観念が私のうちにあるその神、いいかえると、私が把握することはできないが、しかし、ある仕方で思惟によって触れることのできるところの、全ての完全性（perfectio）をもっており、いかなる欠陥からも全く免れている神である。これらのことから神が欺瞞者でありえないことは明らかである。なぜなら、すべて奸計と欺瞞とはある欠陥にもとづくものであることは、自然の光によって明白であるから」（AT. Ⅶ. 52.）

「すなわち、先ず第一には、神が私を欺くなどということはありえないことであると認める。なぜなら、すべて偽りあるいは欺きのうちにはなんらかの不完全性（imperfectio）が見出されるからである。そして、欺きうるということは、なるほど明敏さあるいは力の証拠であると見えぬでもないが、しかし、欺こうと欲するということは、疑いもなく悪意もしくは弱さを証するものであり、したがって神にふさわしくないのである」（AT. Ⅶ. 53.）

以上のことから、神の完全性から欺きは出てこないことになる。むしろ、欺きが出てくることは、不完全であることの証拠になってしまう。つまり、神は全能であるとともに、「完全性をもっており、いかなる欠陥からもまったく免れている」（AT. Ⅶ. 52.）がために、誠実でなくてはいけないのである。たとえ、人間に不誠実であることが見抜けないとしても、神自身が不誠実であれば、それは自己矛盾になるのである。永遠真理創造説における神は、神の無限で全能な力能を表すために、提示された神なのであるが、真理が何度も創造されたら、誠実な神ではなくなってしまうのである。したがって、神の完全性から導かれる誠実性、すなわち「欺かない」という点から言えば、神が創造するのは一度限りであり、真理を設定するのも、その時に限るのである。もちろん、真理を設定する以前においては、神は自由であり、何者からも束縛されることがなく、非決定であると言える。したがって、いかなる真理をも設定可能であったということまでは言えるだろう。

ただし、神の全能性を主張するが故に、神自身の本性に関わることに反した場合、その全能性・完全性をも否定してしまうことになりかねない。これは、ある意味では、自己言及のパラドックスの様相を呈している。それは、神が自分で設定した真理体系によって、自らを否定してしまうことになりかねないからである。このようなことが生じないためにも全能性を楯にして、矛盾である真理の体系あるいは真理の変更を主張することは、避けるべきである。なぜなら、神の「全能性」を把握することは不可能だからである。むしろ、神の「無限性」と「理解不可能性」を基にして、神を理解するべきである。次のことがそのことを表している。

「有限者である私によっては把握されないというのが、無限者の無限者たるゆえんであるからである。そして、私がまさしくこのことをよく理解して、私の明晰に認知するもの、何らかの完全性をそなえていることを知っているもの一切が、かつまた、おそらくは私の知らない他の無数のものが、あるいは形相的にあるいは優勝的に、神のうちにあると判断するだけで、私が神について有する観念が、私のうちにあるすべての観念のうちで最も真であり、最も明晰判明であるには十分なのである」(AT. Ⅶ. 46.) と。

つまり、神が無限者であるということから、我々有限者には把握することはできないのであり、神は何らかの「完全性」を有しているのである。その「完全性」から「全能性」と「誠実性」が出てくるのである。それ故に、我々は神の「無限性」と「理解不可能性」によって、明晰判明に理解できるのである。したがって、神を「全能性」という点だけでは「誠実性」と抵触するため、神を把握することは不可能であるが故に、「完全性」と言う点から神を理解するべきなのである。

むすび

以上のことにより、永遠真理創造説の神と「欺く神」は、真理の設定・変更という点では共通点を持ち、「欺く神」に永遠真理創造説の神を反映することもできると言えるだろう。両者は自由な意志によって、どのような真理をも設定することが可能だったのである。そういう意味では、両者とも「すべてをなしうる」ことができるのである。しかし、この両者の違いは、誠実性ということに関して、全く異なる。永遠真理創造説の神は誠実な神であり、「欺く神」はまさに欺瞞者なのである。したがって、この点において、永遠真理創造説と「数学の懐疑」は異なっている。しかし、デカルトの神においては、この点が重要なのである。神が誠実か不誠実かという点は、神の本性に関わることである。結局、永遠真理創造説の神と「欺く神」は、全能性を備えてはいるが、誠実な神か欺く神かという点で、完全性が異なる。この相違点によって、永遠真理創造説を「数学の懐疑」の中に読み込むのは適さないのである。

ここにおいて、永遠真理創造説と「数学の懐疑」との関係を切断することが示された。つまり、永遠真理創造説と「数学の懐疑」とでは、一見関係するように思われるし、「数学の懐疑」は永遠真理創造説を想定しているように思えるが、両者を関連づけた場合、困難な問題が生じるのである。したがって、「欺く神」に永遠真理創造説の神を反映させることは不適切なのである。

註

(1) この点に関して、代表的な立場としてグイエがいる。H. Gouhier, *Essais sur Descartes*, Vrin, 1973, pp. 185-196. また、小林道夫氏もグイエと同じ立場である。小林道夫 『デカルト哲学の体系』 勁草書房 1995年 96-99頁、104-108頁。また、ロディス・レヴィスは積極的に『省察』の中に永遠真理創造説を読み込もうとするが、それは「数学の懐疑」の箇所ではなく、「第五省察」の箇所であり、永遠真理創造説を自然学に形而上学的基礎を与えることとして取り扱う。G. Rodis-Lewis *L'Oeuvre de Descartes*, J. Vrin, 1971, pp. 125-140. 一方、ゲルーの立場は永遠真理創造説の神と欺く神を相反するものと考える。その理由は、前者は真なる神とその全能についての認識に立脚しているが、後者は偽なる神の概念に基づいているとする。M. Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons I*, Aubier, 1968, p. 45. しかし、私は両者とも全能性を備えていると考える。その理由は、「数学の懐疑」の箇所の古い意見に「すべてのことをなしうる神が存在する (Deum esse qui potest omnia)」(AT. Ⅶ. 21) とあるからである。また、欺く神に関しては、懐疑の途上で出てきたことから、真・偽の判断はまだできていないため、偽であるとは言えない。したがって、両者を区別する理由は、真なる神・偽なる神ということでは区別できない。

(2) 本文中にあるデカルトからの引用はすべてアダン・タヌリ版全集によるものとする。*OEuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris, J. Vrin 1964-1975 これを AT. と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。

(3) 「真ではない」ということは、少なくとも「真である」ことが理解されて言えることである。したがって、「真ではない」ということは、我々が「真である」という体系を理解していることを前提にしている。この点に関しては、小林氏と同様に、「神の見地からすれば、真ではないということも可能であるということを含意する」ということは十分に言える。小林道夫 「『デカルト永遠真理創造説』再論 (一)」『人文研究』 大阪市立大学文学部紀要 第49巻 第3分冊1997年 22頁。しかし、小林氏は、同論文35頁において

更に強い主張をしている。「神は、単に現実の数学的真理が真ではないようにすることができたというにとどまらず、一般的に、矛盾律の逆をもなしえたと主張されていることである」と。この点を認めると、神の誠実性に抵触するため、私はここまでは言えないと思われる。小林氏が根拠にするデカルトの「1644年5月2日のメラン宛の書簡」については、検討する余地がある。ただし、小林氏が同論文21頁で神の属性について「理解不可能性」と「無限性」と「全能性」と言う概念を挙げているが、このことはデカルトの神を理解する点では、私も同意見である。

(4)　この点に関しては、石黒ひで氏と同じ立場である。Hidé Ishiguro "The Status of Necessity and Impossibility in Descartes" in *Essays on Descartes' Meditations*, ed A. O. Rorty, University of California Press, 1986, p. 460, pp. 464-468.（『現代デカルト論集Ⅱ英米編』 勁草書房　1996年　所収　石黒ひで 「デカルトにおける必然性と不可能性の根拠について」 40頁、47-52頁）

(5)　ここで、次のような反論が出てくると思われる。神の視点から矛盾であるということが、体系を成り立たせないと言うことは、結局は、我々が理解するところの矛盾の意味であるのではないだろうか。したがって、我々には理解不可能であり、神にとっては矛盾であると理解可能な体系ではありえないということになり、結局、我々が理解可能な体系についての議論であると言うことになる。したがって、この議論は無意味であるということになる。しかし、私は、我々には理解不可能であり、神にとっては矛盾であると理解可能な体系というものは、結局は、我々には見出すことができないのであり、もし、そのようなものがあったとしても、単に我々には理解不可能な体系と言うべきなのである、と考える。したがって、私は矛盾であるということを使う以上、神の視点からでも、真理の体系が成り立たないことを意味すると解する。

※本稿は、1998年5月23・24日の日本哲学会第57回大会一般研究発表（於：金沢大学）での原稿を基にして、加筆・修正したものである。

（くぼた　しんいち　哲学）